

注意!

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。
 ■文中で旧 URL (<http://www.nouyou.kitakami.iwate.jp/agri/>) を記載している場合、新 URL (<http://i-agri.net>) に読み替えてください。

平成 16 年 1 月 発行

病害虫防除技術情報 No.15-1

岩手県病害虫防除所

平成 15 年に穂いもちが多発した要因と少発地域の特徴

平成 15 年は葉いもちの発生は少なかったが、穂いもちが多発となった。過去の冷害年や近年の発生状況等から推定される穂いもち多発要因は以下のとおりである。

- 8 月は全般に降雨日が多く、葉いもちの発生増加と穂いもちの感染を助長した。
 - 多発地域では葉いもち発生圃場が散見され、これらが地域の穂いもち伝染源となった。
- 一方、地域全体で葉いもちに対する防除を徹底した地域では、葉いもち発生圃場がほとんどみられず、穂いもちの発生も少なかった。

◇平成 15 年のいもち病の発生状況

- 1 葉いもちの全般発生開始期は平年より早い 6 月 28 日であったが、その後の発生は少なく推移し、出穂始期～出穂期における発生は平年より少なかった(図 1)。
- 2 穂いもちの発生は、9 月上旬以降に増加し、収穫期には多発生となった(図 2)。地域的には県南部、奥羽山間部、沿岸部で発生が多く、発生程度の高い圃場が目立った(図 3)。

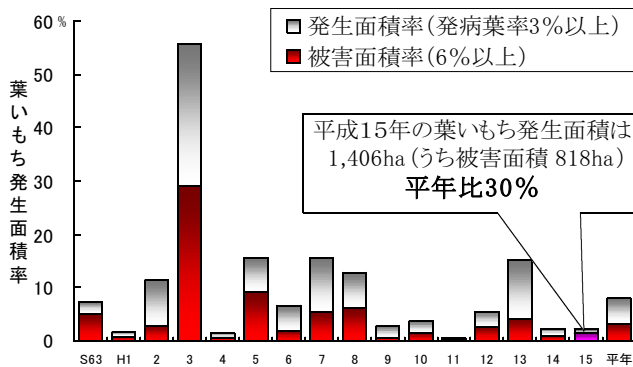


図 1 葉いもち発生面積率の年次推移 (200 圃場調査、出穂始期～出穂期)

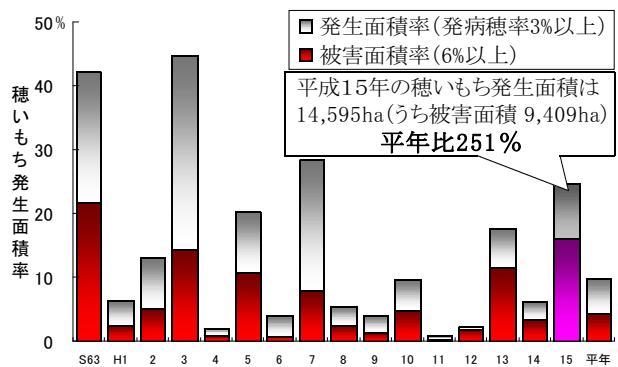


図 2 穂いもち発生面積率の年次推移 (254 圃場調査、収穫期)

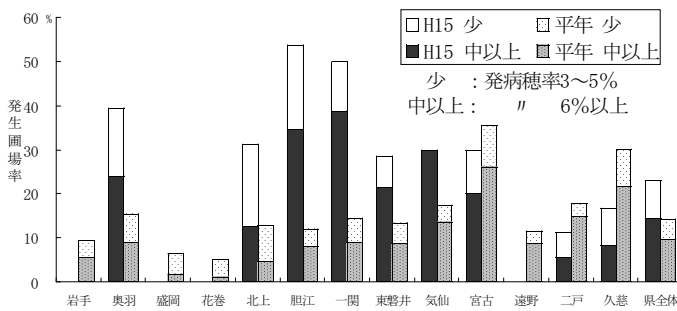


図 3 地域別の穂いもち発生圃場率(収穫期)

表 1 8 月の降雨日数

	上旬		中旬		下旬		8月合計	
	平年	H15	平年	H15	平年	H15	平年	H15
二戸	3.4	4	3.5	4	4.5	7	11.3	15
盛岡	3.2	2	3.0	4	4.5	10	10.6	16
北上	3.0	3	3.5	6	4.8	9	11.2	18
江刺	2.7	1	3.4	6	4.3	9	10.5	16
一関	3.2	5	3.4	6	4.2	8	10.8	19
宮古	3.3	3	4.0	6	4.5	6	11.8	15

*: 降雨日は24hで0.5mm以上の降雨があった日

◇平成 15 年に穂いもちが多発した要因(多発要因まとめ)

- 1 8 月は全般に降雨日が多く、葉いもちの発生増加と穂いもちの感染を助長した(表 1)。
- 2 穂いもちが多発した地域では、葉いもち発生圃場が散見され、これらが地域の穂いもち発生量に影響を及ぼしたと考えられる(図 3)。
- 3 長期間続いた低温、寡照により、水稻のいもち病菌に対する感受性が高まっていた。また、出穂期が平年より遅れ、出穂開花がばらついたため、穂いもちの感染期間が長引いた(図 4)。

4 防除の面からは、穂いもち予防粒剤は例年並の時期に施用されたが、出穂開花の長期化と降雨日の連続が相まって防除効果が十分ではなかった。また、追加防除の多くが8月末～9月と穂いもち確認後の散布であり、防除効果が不十分であった(図 4,5)。

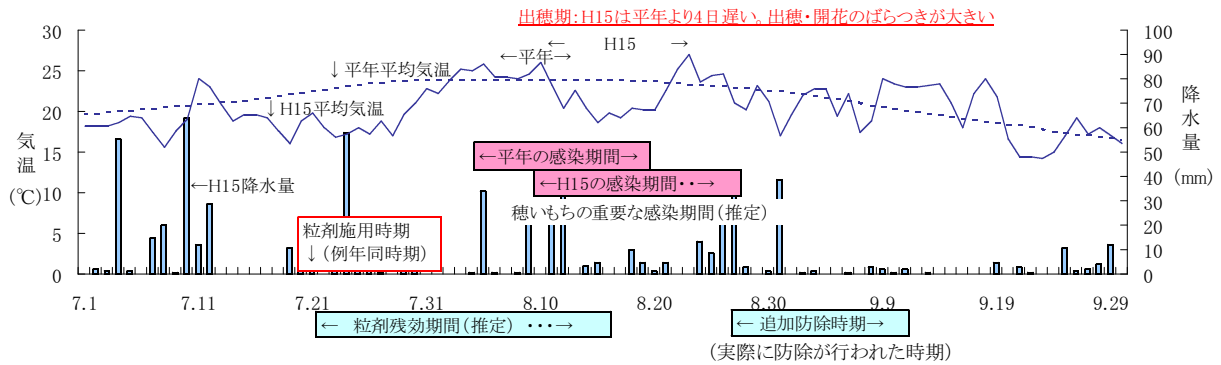


図 4 穂いもち多発要因解析模式図 (一関：7月～9月)

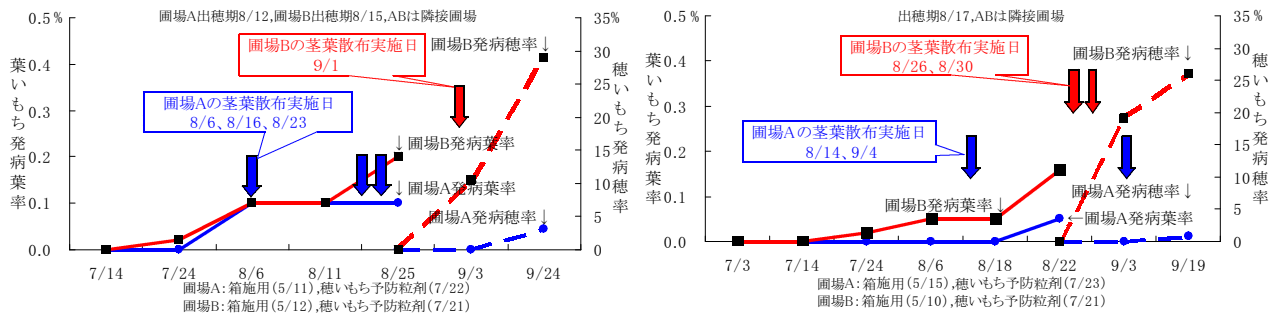


図 5 追加防除時期の違いによる穂いもち発生推移

◇平成 15 年に穂いもちの発生が少なかった地域の特徴 (少発地域まとめ)

穂いもちの発生が少なかったのは、岩手郡北部、盛岡、花巻、北上市東部、江刺、遠野地域であった。これら地域の多くは、地域全体の葉いもちに対する防除圧が高く、地域内に伝染源となるような葉いもち発生圃場がほとんど無かったことが、穂いもち少発生の要因と考えられる (表 2)。

表 2 いもち病の発生が少なかった地域の発病調査結果及び管内の防除対応 (防除対応は防除員調査を一部改変)

	病害虫防除所 巡回調査圃場数	出穂始期～出穂期 葉いもち平均発病率	収穫期穂いもち 平均発病率	管内の主な防除体系		管内の葉いもち 予防粒剤施用率
				葉いもち	穂いもち	
JA盛岡市管内	2	0%	0%	箱施用剤	-	95%
JAいわて中央管内	14	0	0.2	箱施用剤	予防粒剤	95
JAいわて花巻管内	18	0	0.4	箱施用剤	予防粒剤	99
JA江刺市管内	6	0	1.7	箱施用剤	予防粒剤or茎葉散布	99
JAとおの管内	16	0	0.2	箱施用剤	航空防除	91
JAきたかみ管内	6	0	0.1	箱施用剤	予防粒剤or茎葉散布	99

穂いもちの発生量は気象条件に大きく左右される。従って、平成15年のような穂いもちの発生に極めて好適な異常気象条件下において、多発生を抑制するためには以下のような対策が必要と考えられる。

- ① 本田持ち込みを防ぐため、育苗期の感染防止に努める。
- ② 補植用取置苗は本田発生の伝染源となるので、田植後直ちに処分する。
- ③ **葉いもち防除を地域全体で行う。**
- ④ 穂いもちの基本防除 (予防粒剤施用または出穂直前・穂揃期の茎葉散布) を必ず実施する。
- ⑤ **葉いもちがほとんどない圃場でも、低温等で出穂・開花期間が長期化したり、出穂後降雨が続く時は周辺圃場を見回り、発生を認めた場合は追加防除を行う。**
- ⑥ 緊急的に地域一斉防除を行う体制の再点検を行い、必要に応じて共同防除体制を整備する。